

本日は御多忙な中、全員協議会を開催いただきありがとうございます。

令和2年7月豪雨災害から4カ月、そして、もうすぐ5カ月が経とうとしている今、私たちが失ったものがあまりに大きかったことに、改めて気づかされ、発災当時とはまた違った喪失感を感じています。

本市で20名という尊い人命、家、車、農地、施設、鉄道、文化財、遊び場、地域コミュニティ、健康、やる気、思い出など、形あるものから、形のないものまで数えきれず、経験してはじめてわかる悲しみ、苦しみ、そして2度と繰り返してはならないという決意を新たにしています。

現在、住まいの再建、なりわいの再建に向けて、取り組みを進めているところですが、同時に、将来のまちの姿についてもその方向性を早急に示すことが、強く求められています。

本市は、これまでの先人たちが積み重ねて来た歴史に恩恵を受け、清流球磨川の恩恵を受け、今の地において営みを続けて来ました。

私は、本市の市長として、そのような積み重ねを尊重し、愛着のあるこの地で、また同じように、いや、それ以上に心豊かに過ごすことが出来るまちづくりをしたいと強く思っています。

本市が、そのようなまちづくりを行う上で、最も重要なことは、安全度の向上です。また、同じ所に住めるのか、また、同じところで事業を進めていいのか、という安全に対する不安を多くの方がお持ちです。私は、発災当初から、国、県に対して、あらゆる手法を排除することなく、治水安全度が高まる手法を検討してほしい。そして、出来ることから、すぐにやる。出来ることは、全てやってほしいとお願いして来ました。

こういった中で、昨日19日、蒲島知事が、本市にとって、新たなまちづくりを進めるにあたり大変重要な、球磨川流域の治水の方向性を表明されました。

先ずもって、知事におかれましては、県内を廻られ、多くの民意を受け止められ、相当お心を砕かれ、深慮されたと拝察いたしますが、被災地に配慮いただき、約束された通り、このように早い時期に治水に関する方針を御決定いただき、心からの感謝と敬意を表する次第です。

そして、今回の知事の方針を受け、私自身も「命」を守るための抜本的治水と清流を守るという自然環境への配慮が最も両立するという点で、現実的かつより良い選択として、新たな流水型ダムの建設による治水対策を受け止めさせていただきます。

知事も御懸念のように、ダムによる治水対策については、様々な意見や想いがあり、不安や不信に伴うものもあると認識し、理解もしておりますが、私も市長として最大の責務である市民の生命を守るという原点に鑑み、政治的決断をもって、また、流域住民の最大の願いである清流を守りたいという想いを実現すべく、流水型ダムを中心にした抜本的治水を流域の皆様と一体になって推進してまいります。

今回の豪雨災害については、国、県、流域市町村で検証を行い、検討を進めていただきました。これまで治水対策協議会等において、昭和40年7月洪水と同規模の、人吉地点で毎秒5,700m³への対応を目標流量とされて、検討がなされていりましたが、今年の7月4日出水では、人吉地点で最大毎秒7,000m³を超える流量が流れたと推定をされています。

これは我々の治水に対する認識を大きく変えるものであり、これまで想定された基本高水以上の洪水が流れるという事態を受け、今後も同様の降雨があるという認識の下に、治水対策の前提自体を見直さなければなりません。

前提が大きく変わったことで、対処方法も変えなければなりません。つまり、これからも地球規模の気候変動によって、今回と同様の大雨が予測される中で、検証結果のようにダムの効果や新たなダムを中心にした抜本的治水による防災、減災、縮災に大きく期待をします。

私もこの流水型ダムという治水施設に精通している訳ではありませんので、今後、さらに理解を深めて行く必要がありますし、人知の及ばない自然の猛威が相手である以上、ベストという治水対策はないことを考えれば、今後も流水型ダムにプラス、考えられるすべての治水対策を講じて、より治水安全度の高い、限りなくベストに近づく、ベターミックスの対策をお願いしたいと存じます。そしてこのことで、先人から我々に至る数千年、数百年にわたって歴史を刻み、愛情を注いできた大地(場所)で、これまでどおり球磨川と共に暮らしているという希望の実現に、限りなく近づいたと強く確信をしています。

これまで、本市議会におかれましても、長年にわたって特別委員会を設置され、治水のための議論が行われてきましたが、先の市議会において、改めて「治水・防災に関する特別委員会」が設置されましたので、市議会と共に市民の皆様の想いや期待、さらには不安の払しょくに応えてまいります。

ここで、あらためて治水に対する私の考えを述べさせていただきます。現段階で、私なりに考える本流域の治水対策の条件として、5つの課題を設定しています。

1つは、一定の条件で安全・安心な住む場所を示すことができる抜本的な治水対策であること。2つ目は、環境や生態系といった自然や景観に配慮した治水対策であること。3つ目は、本市だけではなく流域全体に及ぶ治水対策であること。4つ目として、市民間で分断や対立の構図が生じない。多くの方々に理解いただける治水対策であること。そして、最後が、シーズンを選ばない台風や来年度の出水期に対する早急・応急の治水対策を実施することです。5つ目は、ダム建設をはじめ治水対策には相当な期間を要するため、実施可能なものから取り組むということも含んでおります。

もちろん、この5つと同様に重要な課題は、避難体制の確立であり、一人の犠牲者も出さないソフト対策について、今回の検証も含め、引き続き最重点課題として取り組む必要があります。

「清流」を守る「新たな流水型のダム」を含む知事の御提案は、私が設定しましたこの5つの課題に照らしても、十分に合致していることはもちろん、緑の流域治水による「球磨川モデル」の実現に向け、流域全体で支え、我々もその一翼を担っていかなければならないと意を強くしています。

川辺川ダム建設計画以来という歴史でも、50年以上を経ている本流域の治水について、ダムによらないものも極限まで検討され、今回の大水害という経験、検証を踏まえ、導き出された蒲島知事の方針ですので、今後もあらゆる課題を解決しながら実現されるものと期待をしていますし、何よりも流域住民の「球磨川への深い愛情」について受け止められた知事の政治哲学を信じたいと存じます。

そして同時に、私共も流域に生きる当事者（上流域から守られる受益地として、下流域を守る上流域自治体）として責任を果たす所存です。

平成20年の白紙撤回の折に「時のアセスメント」という言葉を使われましたが、計画から50年以上、前回の判断から12年経ち、この時のアセスメントがさらに進展し、21世紀の科学の力と人間の英知を持って、清流球磨川の変わらない恵みの中で、安全、安心な暮らしが約束される新たな治水対策が実現するものと確信しています。

一方、今後のまちづくりですが、歴史を紐解きますと、記録にある寛文9年(1669年)、正徳2年(1712年)の大水害から数えて、おおよそ300年ぶりの大洪水によって、相良清兵衛が行って以来、400年ぶりのまちの大改革が喚起されるということになります。私たちは人吉にとって、400年ぶりの抜本的まちづくりの機会に巡り合わせたということにもなりますし、その使命を与えられたという考え方もできると思います。

今回の被害からの復旧・復興を前向きにとらえて、50年後はもちろん、100年後、200年後を思い描いた、球磨川と共に生きるまちづくりに取り組みたいと考えております。具体的には、川や道路を含む市街地がどうあるべきか、点から線へ、線から面へ、面から全体に、土地利用から都市計画といったものすべてについて検証し、住民の皆様と共に取り組んで参ります。

このような状況ですが、いや、このような中でこそ、市民の皆様と大きなまちづくりの目標を掲げて、国、県に御支援を仰ぎながら、一步一步、進めてまいります。

議員各位におかれましては、さらなる御支援、御協力を賜りますようお願いを申し上げます。

令和2年11月20日

人吉市長 松岡 隼人